

# ドイツの協同学習と汎用的能力の育成 —持続可能性教育の基盤形成のために—

原田 信之 著  
あいり出版 2016年

佐賀大学教育学部准教授  
宇都宮明子



現在、ESDが学校教育において求められている。本書では、ESDを、将来にわたり現状の歩みをこのまま続けていくと、世界はいつか持続可能性を維持できなくなるとする前提に立ち、「環境保全」、「経済の実現性」、「現世代と次世代にとつての公正な社会」という三つの視点から、持続可能な未来社会づくりのために自分自身と社会の価値観と

行動の変容を促す教育であると定義する。この定義から、ESDでなされる、持続可能性の追求を目的とした自己と社会を相関的に変容させるための学習、つまり、自己内で行われる「リフレクション（熟考）」と「行動変容」と共に、自分自身と他者（集団・社会）との関係で行われる「リフレクション（熟考）」と「行動変容」という、二つの次元の相互交渉を基盤に行われる学習という学習像を導く。この学習を有効に機能させるために、ESDでは、自己コンピテンシー、社会コンピテンシー、コミュニケーションコンピテンシー等、教科横断的な能力＝汎用的能力の育成が求められるのである。筆者の専門研究領域であるドイツの学校教育では、早くから環境教育を実施し、今世紀前からESDを推進している。その背景に深刻な環境問題があるのは勿論であるが、ESDが汎用的能力を育成するのに有効であることも推進の理由である。そして、ドイツでは、汎用的能力を育成するために、集団成員が共に力を合わせて学ぶことで、社会性の向上に寄与するのみならず相乗的に学習の質も高める協同学習を有意義な教育方法と位置づけている。学級内外からなる協同学習を通して汎用的能力の育成を可能にするESDは、近年の日本の教育動向に合致し

ており、多様な可能性に開かれた研究対象といえよう。

本書は、このESDの可能性に注目し、ESD、汎用的能力、協同学習をテーマとして検討し、汎用的能力の中でも社会コンピテンシーに焦点を当て、その育成に有効な協同学習を通して持続可能性教育の基盤づくりを模索するという近年の教育動向の課題に応える挑戦的意欲作となっている。

本書の構成は、以下の通りである。

- 序章 グローバル時代における生きる力の探究
- 第1章 欧州における新展開とESDコンピテンシー
  - 第1節 新たなキー・コンピテンシーの策定
  - 第2節 ESDコンピテンシー
- 第2章 コンピテンシー構築志向型カリキュラムと汎用的コンピテンシー
  - 第1節 コンピテンシー構築志向型カリキュラム
  - 第2節 コンピテンシー・モデルと汎用的コンピテンシー
- 第3章 ドイツの協同学習の実像
  - 第1節 社会コンピテンシーは、ごくむ協同学習の実践
  - 第2節 伝統的なグループ学習

から協同学習への転換  
学習効果がもたらす

第4節 社会コンピテンシーの育成

第4章 協同学習の授業構成原理と授業観察の視点

第1節 協同学習としての要件

第2節 グループ活動に焦点化した授業観察

第3節 話し合い活動とコンピテンシー・チェックリスト

第5章 協同学習の実践展開

第1節 協同学習を促進するSINUS-Transfer

第2節 学びの共同体と協同学習  
～日本の協同学習論～

序章では、「生きる力」の再規定に対して問題を提起する。日本では、「生きる力」はDeSeCoプロジェクトが提示したキー・コンピテンシーの考え方を先取りしているという見解が示されている。まず、ドイツのハンブルク州の学習指導要領を事例に、コンピテンシー志向型の教育課程の基盤（スタンダード）としての学習指導要領においては、「教科の枠を超えて育成する（汎用的）コンピテンシー」の獲得が課題とされ、コンピテンシーとしての学力要素を能力枠を設定して示す形式が採られて

いることを指摘する。一方で、大綱的な性格を保持し、学力要素の詳細規定にはなじまない「生きる力」は学力としての要素析出とその到達水準化に配慮されないとし、「生きる力」の「先取り」見解に疑義を呈する。そこから、「生きる力」を上位理念にとどめ、ESD、社会コンピテンシー、協同学習といった鍵概念を中核として能力の構成要素を明示化するという本書の目的を明確にする。

第1章は、EUとドイツの能力指標の比較考察から、コンピテンシーによる能力指標のスタンダード化とともに、ESDコンピテンシーの具像を描く。第1節は、EUとドイツの能力指標の比較考察である。EUのキー・コンピテンシーとして、二〇〇七年の『欧州レファレンスの枠組み』(ERF)において示された欧州共通の能力概念としての「生涯学習における八つのキー・コンピテンシー」と二〇〇八年の「欧州における生涯学習のための資格認定の枠組み」(EQF)を取り上げる。ERFの生涯学習を展望した八つのキー・コンピテンシー、EQFの生涯学習を促進させるツールとしての知識・技能・コンピテンシーからなる八段階の能力水準に区分した標準尺度が示され、ドイツではEQFの標準尺度と連結するとともに、独自色を打ち出すために、どのような能

力枠や水準尺度が設定されているのが論じられる。本節からは、EU諸国では加盟国共通の能力枠や標準尺度の設定が図られる段階にまで進んでおり、日本より遙かにスタンダード化が進展していることが了解されよう。

第2節では、ESDにおいて育成すべきコンピテンシーをドイツや日本のESDを事例に考察し、スタンダード化が試みられている。本章ではEUで進展するコンピテンシーによる能力指標のスタンダード化を示し、序章で提起した生きる力がこのスタンダード化においてどのように位置づけられるのかを考察することで序章の問題提起をさらに深め、問題の所在を明らかにしている。

第2章は、ドイツにおけるコンピテンシー・モデルや汎用的コンピテンシーを各州文部大臣常設会議(KMK)や各州学習指導要領の分析から理論的に考察する。第1節では、PISAショック後にKMKが決議したドイツ国内共通の教育スタンダードを核とした教育改革の基本構想や動向を踏まえた上で、このスタンダードに基づいて作成された学習指導要領の一事例としてのチューリッゲン州基礎学校学習指導要領のコンピテンシー・モデルの分析からコンピテンシー・スタンダード志向型の授業について論じる。さらにコン

ピテンシー・スタンダード志向型の授業を実際に実施するために、各校の指導計画ではどのようにコンピテンシーを開発すべきかを、チューリッゲン州学習指導要領におけるESDの考え方に基づいて考察する。

第1節は、国家・各州・各学校という各レベルでの能力概念規定の再定義を基に、コンピテンシーの構成要素とその機能を理論的に検討する。

第2節では、ドイツにおいて提起されている複数のコンピテンシー・モデルの分析と、諸州共同版、ノルトライン・ヴェストファーレン州、ハンブルク州の学習指導要領にみられるコンピテンシーの枠組みの考察から、実態を持った資質・能力としての汎用的コンピテンシーを具体的に描き出す。

第3章は、第2章で示した汎用的能力の中でも社会コンピテンシーを育成するのに有効な協同学習の実像を、ドイツ、ハッティの研究、日本の協同学習論といった幅広い領域に及ぶ研究の分析から解明する。第1節では、ドイツにおける実際の協同学習の実践やその実践を評価する授業観察研修の検討に基づいて協同学習の効果を実証的に検証する。第2節では、伝統的なグループ学習と協同学習の相違を明確にした上で、協同学習への転換の必要性を論じる。第3節では、ドイツ、日本、PISA

調査、ハッティといった多様な実証的研究の分析から、協同学習の有効性を考察する。第4節では、協同学習を通して育成が図られる社会コンピテンシーの定義とともに、その育成モデルの解明を図る。

第4章は、主としてドイツの協同学習論から社会コンピテンシーの育成を保証する協同学習を実現するための授業構成原理と授業評価視点を導き出すことで、授業開発に向けての具体的な方策と方途を考察する。本章は、前章までの本書のテーマに関わる理論的考察を踏まえ、協同学習を原理とした授業を構成するための実践的考察となっている。

第1節では、協同学習の基本原理とその原理を実現するための教師の役割と授業構成の手順を明示する。第2節では、ドイツや日本の先行研究に基づいて、協同学習において多様に展開されるグループ活動を観察するための評価方法や評価指標を提示し、その成果と課題を論じる。第3節では、協同学習の中でも産出行為としての「話し合い」に着目し、その観察評価の手法を明らかにする。

第5章は、前章までのESD、汎用的能力、協同学習に関する理論的・実践的考察を踏まえ、ドイツと日本の実際の協同学習論に基づいた授業実践事例を提示する。第1節では、協同学習を促進する教育プ

ログラムの事例として、ドイツの SINUS-Transfer を取り上げ、その授業構想や協同学習の課題例を通して、効果的な協同学習が可能となるカリキュラムの具体像を提示する。第2節では、日本の協同学習論として「学びの共同体」を取り上げ、そのメカニズムや授業技法を論じ、実際に授業実践モデルを設計する上で課題を提起する。

以上の章構成からなる本書は、ドイツを中心とした諸外国の最新の研究成果に依拠し、ESD をコンピテンシー志向で展開するためのスタンダード化をいかに進展させるかの理論的・実践的考察となっている。

本書が扱う論点は、コンピテンシー・ベースの教育論、持続可能性教育、アクティブ・ラーニングなど、学習指導要領の改訂のポイントとも重なり合う点も多く、昨今の教育論議の俎上に載せられる重要な鍵概念である。そのため、これらの論点に関する多くの著書や論文が発表されていることは言うまでもない。しかし、本書はそれらと三つの点で一線を画している。

第1は、本書が日本、ドイツ、EU、世界で最も影響力を持つ教育学者として注目を集めているハッティの研究といった幅広い研究を分析対象とし、精緻で深遠な分析に裏打ちされた理論的考察に基づいている点

である。本書のテーマであるコンピテンシー、協同学習、ESD は、その汎用性、従来の学習との混同、その多様性の故に、各論者によって異なっており、各論者によって異なる定義されたり、意味が不明瞭なまま使用されたりする曖昧な概念となっている。本書では、多くの先行研究における定義を詳細に検討した上で、これらの概念を再定義することで、これらの概念に付きまとっていた曖昧さを払拭し、協同学習を通して社会コンピテンシーを中核とした汎用的能力の育成を可能にするESDの実態を説明する理論的考察が可能になっている。

第2は、本書がドイツ、日本、ハッティ、PISA 調査の分析から明らかにした授業開発原理や授業評価視点の提示や実践事例を通して汎用的能力の確実な育成を保証する授業実践事例を提示するといった実践的考察がなされている点である。本書は、一つの授業構成論や評価手法のみに依拠するのではなく、多様な先行研究における授業開発原理や授業評価の視点を抽出し、その有効性や課題を検討することで、汎用的能力を評価し、実質的にその育成をめざす授業実践を提示することに成功している。

第3は、本書における理論的考察と実践的考察が有効に機能し合い、理論研究と実践研究双方に対し有益

な示唆を提供している点である。本書では、第3章までのESDにおけるコンピテンシーによる能力指標のスタンダード化を進展させるための理論的考察を基盤として、その実現を可能にする授業構想と開発の手順、評価規準を具体化する実践的考察がなされている。これにより、協同学習を通して社会コンピテンシーを中核とした汎用的能力を育成するESDの実現に向けた首尾一貫した提案がなされている。

これら三点の本書の卓越さを可能にしているのは、本書の随所にみられる「可視化」である。汎用的能力、汎用的能力と生きる力の関係性、ルーブリックにおける評価指標の規準といった教育論議の核心は、日本の教育学研究ではブラック・ボックスとされ、日本の多くの先行研究ではこの曖昧さを保持したまま、教育改革について論じているというのが現状である。しかし、これらの論議の核心が曖昧なままでは、コンピテンシー・ベースの能力観に立つ教育改革が進展するはずはない。

「生きる力」とコンピテンシーを同義とみなす見解を棄却し、「生きる力」を学力要素の詳細規定にはなじまない上位理念とみなし、新たな能力枠の下でのスタンダード化を意図している本書が、この問題意識を出発点としていることは明らかであ

る。そして、本書は、可視化できないソフトスキルである社会コンピテンシーに敢えて注目し、コンピテンシー・モデル、協同学習の構成要素や要件、授業評価の視点、協同学習の有効性を可視化することで、理論的考察も実践的考察も根拠に基づいた説得力と一貫性を具備した論証となっている。結果として、本書は日本の教育学研究に対する鋭敏で気骨ある問題提起をなしており、ここにこそ著者の真骨頂が発揮されている。

コンピテンシー志向、構成主義学習論、アクティブ・ラーニングなど盛んに取り沙汰されている論議を真に意義あるものとし、教育改革を実質的に進展させるために、本書が多くの教育関係者の方々の必読書となることを期待したい。